単元の言語活動１
◆折句の技法を用いて、短歌を作る

活動のねらい

⑴和歌の歴史が短歌に受け継がれていることを理解した上で、実作を試みる。
⑵実作に際しては、古典和歌の技法が現在にも生きていることを理解しながら「折句」の手法を用いる。これによって歌が高度な言葉遊びの要素を持っていることを実感し、現代とかけ離れたものではないことを知って親しみを持たせたい。

タイトル・序文の解説

万葉集から現代短歌への流れの中で歌を認識することを目的とする。これによって、歌を詠む心情と表現方法が脈々と受け継がれていることを確認し、〈言語文化〉という認識の中で作品を理解させることを促している。

序文中の正岡子規のエピソードは、短歌が日常生活の中から詠まれてきたことを示している。近代ではこのような平易な歌い方が注目された。難しく考えるのではなく、自身の思いを率直に表現することの重要性を認識させたい。子規の歌にある「あまき」は甘柿、「しぶき」は渋柿を指すと考えられる。渋柿も種類によってはそのまま食することができるものもある。子規の同時期の作品に「つり鐘の蒂（へた）のところが渋かりき」という句があることも参考になるだろう。そのほか、教科書掲載の俵万智の歌なども参考にしたい。

「課題」の解説

課題　今まで学んできた歌を参考にしながら、折句の技法を用いて、短歌を作ってみよう。

古典から引き継がれている技法は様々挙げることができるだろう。実作に際しては、手法としてわかりやすく、生徒にも取り入れることが可能な「折句」を使用するように設定した。折句での実作に当たっては、まず、折句について確認することから始め、現代にも似たような手法が残っていることを認識しながら実作へと進めたい。

折句については、「参考」（二七四ページ下段）の文章から、折句の方法が現代にもつながっていることを確認させる。現代では「折句」とは言わず、「縦読み」と表現される場合がある。このような方法を使ったことがある生徒もいるのではないだろうか。「折句」にある言葉遊びの要素を認識させることで、実作への敷居を低くすることができるだろう。

実作においては、身近な表現であっても一向差支えがなく、楽しみながら作ることで、和歌・短歌への親近感を体得させること

を目的とする。

活動の解説

1　歌は、どのようなテーマで詠まれているのだろうか。各自で自由にテーマを立て、この教科書掲載歌の中から、そのテーマに沿った歌を四～五首、抜き出してみよう。

（例）「春の歌」「秋の歌」「冬の歌」「恋の歌」「色彩が印象的な歌」「孤独を詠んだ歌」「父母を詠んだ歌」など。

和歌・短歌と時代によって言い方は変わっているけれども、人の心のあり方は古今を問わず共通性があることを認識しながら、自身が実作する場合のテーマについて考えさせるようにしたい。

（例）を参考にして、テーマは各自で自由に設ける。場合によっては歌数にも偏りがあると考えられるので、それぞれの場合に応じて選出する歌数を調整してもよいだろう。和歌は〈部立て〉によっておおよそのテーマを知ることもできるので利用することも可能である。以下はその例として参考までに示した。

＊春の歌

・「うらうらに照れる春日に」（二六〇・2　大伴家持）
・「袖ひちてむすびし水の凍れるを」（二六〇・7　紀貫之）
・「ひさかたの光のどけき春の日に」（二六〇・9　紀友則）
・「見渡せば山もと霞む水無瀬川」（二六二・12　後鳥羽上皇）
・「薄く濃き野辺の緑の若草に」（二六三・2　宮内卿）
・「くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の」（二六八・2　正岡子規）
・「清水へ祇園をよぎる桜月夜」（二六八・5　与謝野晶子）

＊秋の歌

・「秋来ぬと目にはさやかに見えねども」（二六一・5　藤原敏行）
・「ちはやぶる神代も聞かず竜田川」（二六一・7　在原業平）
・「見渡せば花も紅葉もなかりけり」（二六三・6　藤原定家）

＊冬の歌

・「山里は冬ぞ寂しさまさりける」（二六一・9　源宗于）
・「志賀の浦や遠ざかりゆく波間より」（二六三・8　藤原家隆）
・「最上川逆白波のたつまでに」（二七〇・3　斎藤茂吉）
・「「寒いね」と話しかければ」（二七一・9　俵万智）

＊恋の歌

・「あかねさす」（二五八・3　額田王）と「紫のにほへる妹を」（二五八・5　大海人皇子）
・「多摩川にさらす手作り」（二五九・11東歌）
・「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ」（二六一・11　小野小町）
・「もの思へば沢の蛍も」（二六二・7　和泉式部）
・「玉の緒よ絶えなば絶えね」（二六四・2　式子内親王）
・「やは肌のあつき血潮にふれも見で」（二六八・6　与謝野晶子）
・「「この味がいいね」と君が言ったから」（二七一・8　俵万智）
・「「寒いね」と話しかければ」（二七一・9　俵万智）

＊色彩が印象的な歌

・「田子の浦ゆうち出でて見れば」（二五九・7　山部赤人）
・「ちはやぶる神代も聞かず竜田川」（二六一・7　在原業平）
・「くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の」（二六八・2　正岡子規）
・「清水へ祇園をよぎる桜月夜」（二六八・5　与謝野晶子）

・「白鳥は哀しからずや」（二六九・１　若山牧水）
・「野に捨てた黒い手袋も」（二七〇・５　斎藤史）

＊孤独や寂しさを詠む歌

・「うらうらに照れる春日にひばり上がり」（二六〇・２　大伴家持）
・「山里は冬ぞ寂しさまさりける」（二六一・９　源宗于）
・「白鳥は哀しからずや」（二六九・２　若山牧水）
・「幾山河超えさり行かば寂しさの」（二六九・３　若山牧水）
・「ふるさとの訛りなつかし」（二六九・８　石川啄木）

＊父母を詠む歌

・「憶良らは今はまからむ子泣くらむ」（二五九・９　山上憶良）
・「父母が頭かきなで」（二六〇・４　防人歌）
・「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にいて」（二七〇・２　斎藤茂吉）
・「太陽が欲しくて父を怒らせし」（二七一・５　春日井建）
・「母にはじまり無限の人を並べたる」（二七一・６　春日井建）

2　1で抜き出した歌の中から、特に好きな歌一首を選び、心情を表現するために、どのような工夫がされているのか、確かめてみよう。

歌の技巧や表現について、改めて注意を喚起することを目的としている。

＊各歌の解説参照。

3　次の手順に従い、感じたことや発見したことを、折句を用いて、短歌にしてみよう。

①『伊勢物語』の「東下り」（六〇～六三ページ）を参照し、折句の技法を確認する。

②詩歌や日常の言葉の中から五音の語を選んで、表の(1)の欄に一字ずつ書き入れる。

（例）・うめのはな（梅の花）・かしわもち（柏餅）・むしのこえ（虫の声）・ふゆやすみ（冬休み）など、季節や行事にかかわるもの
・自分が住んでいる町の名前や自分の名前など、自身に関連するもの
・地名・人名・植物名・動物名など

③歌の内容を考えながら、表の(1)の欄に記入した文字から始まる五音・七音の語を、(2)の欄に幾つか書き入れる。

④歌の内容を考えながら、第一句から第五句まで、それぞれに適切な語を選択し、一首の歌に仕上げる。

⑤グループを作り、各自が折り込んだ語と、短歌によって表現した心情について話し合う。

⑥各自が作成した短歌の中で、わかりにくい部分があったら、互いに指摘し、修正する。

手順に沿って進めば、慣れない生徒であっても歌を作ることが可能であろう。歌を作ることを目的としているのであり、その是非について判断するものではないが、よくできたものは、クラスで披露するなどして、努力の成果を認めたい。

なお、五音の語の例は、あくまでヒントとして提示したものである。

評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 本歌取りや見立てなどの表現の技法とその効果について理解している。〔知・技〕(1)オ
(3) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(4) 時間の経過や地域の文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。〔知・技〕(2)エ
(5) 「書くこと」において、自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にしている。〔思・判・表〕A(1)ア
(6) 進んで和歌や短歌の表現技法とその効果を理解し、今までの学習を生かして、折句の技法を用いて、感じたことや発見したことを短歌で表現しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

（小倉真理子）